国大協
TOPICS

国立大学協会 創立70周年記念式典を開催

永田恭介 国立大学協会会長

萩生田光一 文部科学大臣

河村建夫 国公立大学振興議員連盟会長／衆議院議員

佐々木 毅 国立大学協会元会長（東京大学元総長）／学士会理事長

渡邉光一郎 中央教育審議会会長／第一生命ホールディングス株式会社取締役会長／日本経済団体連合会副会長

2021年3月8日、国立大学協会は創立70周年記念式典を一橋講堂中会議場にて開催し、その模様をオンラインにて配信しました。

式典では、永田恭介 国立大学協会会長の挨拶に続いて、萩生田光一 文部科学大臣、河村建夫 国公立大学振興議員連盟会長／衆議院議員、佐々木毅 国立大学協会元会長（東京大学元総長）／学士会理事長から、これからの当協会への期待も含めて温かいご祝辞をいただきました。そして、記念講演として、中央教育審議会会長の渡邉光一郎 第一生命ホールディングス株式会社取締役会長／日本経済団体連合会副会長より、「未来志向の国立大学に向けて」と題したお話を熱く語っていただきました。

上記の内容については
国大協ホームページ
（https://www.janu.jp/）から
ご覧いただけます。

国立大学協会
The Japan Association of National Universities
https://www.janu.jp/

国立大学 vol.59 March 2021
編集・発行 / 一般社団法人 国立大学協会　〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-1-2 TEL：03-4212-3506

PUBLIC RELATIONS MAGAZINE OF NATIONAL UNIVERSITIES

国立大学

VOL 59
国大協広報誌
MARCH 2021
QUARTERLY REPORT

特集 ニューノーマルに向けて動き出す大学

OPINION | 京都大学名誉教授 京都大学前総長 | 山極壽一

国立大学協会
The Japan Association of National Universities

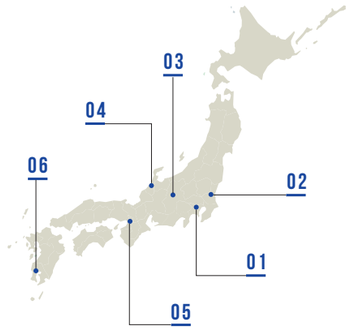
CONTENTS

【特集】
ニューノーマルに向けて動き出す大学

OPINION
京都大学名誉教授　京都大学前総長
山極壽一 …… 02
ニューノーマルをつくる世代に伝えたい
体感と対話のある学びの面白さ

LEADER'S MESSAGE
学長特別座談会 …… 06
東京外国語大学長 林 佳世子（司会進行）
東京藝術大学長 澤 和樹
帯広畜産大学長 奥田 潔
筑波技術大学長 石原保志
連携と協調を力に
ニューノーマル時代の社会づくりへの貢献を

Challenge! 国立大学
01 東京外国語大学
国内外に向けた37言語の
オンライン講座をスタート …… 11
02 茨城大学
実績とステークホルダーの協力を礎に、
大学教育の DX を促進 …… 11
03 信州大学
オンラインによる１年生のための
学修支援体制を構築 …… 12
04 金沢大学
コロナ禍の先にある未来社会を
拓く人材育成に尽力 …… 12
05 大阪大学
動画コンテンツによる新入生の学習保障
−ブレンデッド教育体制確立に向けて− …… 13
06 鹿児島大学
バーチャル家庭訪問を教材に
ヘルスアセスメント教育を実施 …… 13
『ニューノーマル時代に向かって』…… 14



特集に寄せて

ニューノーマル時代の国立大学の役割

オンライン講義がうまくいくことで、多くの地方国立大学は不要ではないかという大学不要論を聞くことがあります。私は、そのようなことは絶対にないと思います。

大学は高等教育の最終の場として必要であり、コミュニティ形成の場です。教育の教は、教える、研究の研は、磨くということで、知識を獲得することです。これはオンラインで今まで以上の情報が得られる可能性があります。一方、教育の育は、育てる、研究の究は、究めるということで、知恵を獲得することです。日を徹しての実験、教授と学生、また仲間との喧々諤々の議論、地域の方々との議論や活動など、その大学の特色や、街の文化にふれ、対面により学生は育てられ、そして社会に出ていき、それが、若者の一生の知恵や感性、自信になります。

大学の界隈にはコミュニティが自然と生まれます。国立大学は地域の特色を生かしつつ、学生を集める大学独自の魅力や特色を持つことが必要です。研究においても学生を産学連携・共同研究に参画させ、国際連携、地域貢献も、学生を海外や街中に送り込み、また大学内や地域でスタートアップ事業の立ち上げ・イノベーション教育をするなど「Student first」ということを忘れてはなりません。DX（デジタルトランスフォーメーション）と対面を最適に融合し、今まで以上に学生への支援をすることが、日本の学術レベル・技術レベルを活性化させる道であり、それがニューノーマル時代の国立大学の大きな役割の一つであると思います。

豊橋技術科学大学長 寺嶋一彦

【特集】ニューノーマルに向けて動き出す大学

OPINION

ゴリラ研究の第一人者として数々の業績を重ねつつ、2020年9月までの
6年間にわたり京都大学総長を務め、学生教育と大学運営に手腕を発揮してきた山極壽一氏。
新型コロナウイルス感染症の拡大により、社会が未だ混迷を続けている今、
次代を担う学生や研究者にとって大切なことは何か？
そして、日本の社会、大学教育はどのように変わっていくべきか？
ニューノーマル時代の学びや大学のあり方について、
グローバルなフィールドでの豊富な経験を通じて交流や見聞を広げてきた氏に考えを語ってもらった。

ニューノーマルをつくる世代に伝えたい体感と対話のある学びの面白さ

京都大学名誉教授　京都大学前総長
山極壽一

“出会う”ことで“気づく”、フィールドでこそ得られる経験

「コロナ禍で最近はすっかり巣ごもりです。大学の総長を辞めたらアフリカに行こうと計画していたのですが、それも諦めました。おかげで本をたくさん読めましたよ」と近況を語る山極氏。

2020年9月に退任した京都大学総長ほか、国立大学協会会長、日本学術会議会長などを歴任。学術・教育界のリーダーとして活躍しつつ、分野を超えた多彩な交流や執筆活動、様々なメディアを通じてのメッセージ発信など、精力的な取り組みを続けている。その氏のキャリアの中心にあるのが、ゴリラ観察を通じて人類の起源を探っていく世界的な霊長類学者としての活動だ。

「新型コロナウイルス感染症の拡大で、学問・教育の世界は多大な影響を被ったけれど、研究者にとって一番厳しいのは、フィールドワークや実験がままならないこと。特に野生のゴリラを相手にしてきた自分には大問題ですね」

コロナ禍により海外への渡航が制限されるということは、現地での観察・調査が欠かせない研究者にとって手足を縛られることに等しい。単に活動の場が奪われるにとどまらず、研究者に必要な素養や能力を育てるうえでも、フィールドに出られない弊害は大きいと言う。

「なぜフィールドに出ることが重要か、外部と交わることが重要かと言うと、人間は“出会う”ことで“気づき”を得る生き物だから。人間は他者の反応によって初めて自分を知り、新しい考え方を取り入れることができる。もっと言えば、人間は自分だけでは自分を定義できない生き物なんですよ。これは相手が人でも動植物でも同じ。出会ったときの直観から、互いにいろいろな反応が生まれ、新しい気づきや思いもよらないひらめきを得たりしますね」

さらに山極氏は、研究者が「自分の言葉」で語るためにも、フィールドでの身体的経験が大きな意味を持つと強調する。頭で考えただけのこと、誰かの手で書かれた書物を通じて知ったことからは、本当の議論は生まれない――学生時代に理学部の恩師や先輩たちから叩き込まれたこの考えは、自身の学問に臨む姿勢に大きな影響を与え、現在も変わらぬ大切な教訓になっていると言う。

心躍る方向に、自分が進むべき学問の道がある

学生時代の話が出たところで、山極氏が霊長類学の道に進んだ軌跡を簡単に振り返ってみる。

「原点は子どもの頃の探検家願望かな。ロビンソン・クルーソーや十五少年漂流記などが大好きで、いつか自分も未知の世界を探りたいと思っていました。その後、高校では、人間とはなんだ？自分は何者だ？ なんてことをいろいろ思い悩んで、結局、進学先は一番好きな数学や物理をやろうと京都大学理学部を選んだ。湯川秀樹博士への憧れもあったし、東京から逃げ出したい気持ちも強かった。ちょうど高校紛争の混乱の最中で、自分が恵まれた環境に身を置くことに、多少の後ろめたさも感じていましたね」

こうして京都大学に進んだ山極氏が夢中になったのは、大学周辺の古書店巡り。宇宙、物理、文学、演劇、哲学など、興味あるあらゆる分野の書物漁りに精を出した。そうするうちに、再び「人間とは？」という根源的疑問が頭をもたげ、「人類学」の自主ゼミに顔を出すようになる。

「ここで理系も文系も超えた文理融合の学問の面白さに目覚めた。理学部や工学部、農学部、文学部など、いろいろな分野の連中と討論して大いに刺激を受けたし、視野も広がりましたね」

その後、所属していたスキー部のトレーニングで訪れた雪山で、思わぬ学問との出会いを果たす。

「雪の中でじっと双眼鏡を覗いている人がいたので話を聞くと、サルを追っている理学部の先輩だった。なぜこんな場所に理学部の人がいるのか、とすぐに興味が湧いた。聞くと、人類の起源や人間社会の成り立ちをサルの観察を通して明らかにする『サル学』を学んでいると言うのです。それは、自然人類学という自然科学の枠に収まらない学問でした。発想が斬新だし面白いと思ったんです。しかもゴリラを対象にすれば、アフリカのジャングルという探険心をくすぐる場所で、学術研究という立派な目的を持って活動できる。そして、京大の霊長類学者で、後に師匠となる伊谷純一郎先生から詳しく話を聞き、先生が書いた『ゴリラとピグミーの森』にも大いに感銘を受けて、これこそ自分が求めていた研究だと心が決まりました」

マウンテンゴリラとともに

1990年カフジの森でキャンプ
（左手前が山極氏）

1992年カフジにて
（中央が山極氏）

山極氏はもともと文献学より体を動かす研究をやりたいと思っていた。この点でも、サルの研究は希望にぴったりだった。また、西洋の学問の受け売りではない「日本発」の学問である点にも、大いに興味をそそられた。

「日本の霊長類研究の創始者である今西錦司先生の研究会にも参加して、『言葉を持たないサルにも社会がある』なんて西洋の人類学者が聞いたら目を剥くような話がいっぱい出てきた。それだけでわくわくするでしょう」

コロナ禍で社会に不透明感が広がる中、自分が進むべき学問分野の選択に迷ったり、悩んだりしている若者も多いはずだ。特に今、フィールドワークや人との接触・対面が欠かせない分野を目指すのは不安や躊躇があるかもしれない。しかし、やはり研究者としての道を選ぶ際には、自身の純粋な興味や直観、こだわりに従うことが大切であると山極氏は語る。

失われつつある「社交」を取り戻すことの大切さ

今回のコロナ禍が教育の場にもたらした大きな変化の一つが、オンライン教育の導入だ。山極氏も京都大学の総長として導入を進め、自らも何度かオンライン講義を担当した。

「オンライン教育をうまく使えばメリットはいろいろあります。学生が周囲を気にせず一対一で教員に質問しやすくなるし、今は自動翻訳技術が発達しているので、教員も言葉の壁を気にせず世界に向けて講義ができ、国際会議も楽になる。障がいを抱えた方や仕事を持つ社会人の授業参加にも役立つでしょう」

その一方、オンラインの限界も痛感していると語る。

「劇作家の山崎正和さんが、2003 年に『社交する人間 ホモ・ソシアビリス』という評論を書いています。この中で彼は、社交というのはリズムだと述べてるんですよ。つまり、自分の欲求を抑えながら、他人と適切な距離をとり、その場の物語の流れに身を乗せていくことが社交であると。これは大学のゼミと全く一緒であり、フィールドワークにも通じること。ゼミであればゼミの“物語”を生み出すために、参加するための心構えが求められるし、部屋や座席の配置、服装など、いろいろな“道具立て”が必要です。でもオンラインは、こうした“場”を完全に無視している。顔以外、画面に映らなければパジャマでもいいし、背景もなんだって構わないでしょ。いわば根無し草のような状態で会話をしなければいけないわけで、これでは“場の物語”になかなか乗れませんよ」

実は今回の取材も、コロナ禍の緊急事態宣言下であったため、京都にある山極氏の自宅と東京の国立大学協会の間でオンラインで実施された。山極氏も、こうした遠隔での対話に慣れたとは言え、パソコンの画面とスピーカー越しに情報をやり取りする状況にもどかしさは拭えないと言う。

「先ほどの評論の中で山崎正和さんは、社交を復活させ、身体的な関わり合いを取り戻す重要性を説いている。この主張がなされたのは、ずいぶん前のことだけど、コロナ禍の現在の状況にも当てはまりますよね。やっぱり相手と同じ場を共有して対面している状況は、緊張感があるし、互いの言うことを信じたり疑ったりしながら、リアルな関係を築いている。大学のゼミなどは、相手の表情や雰囲気を読みながら、暗黙知が飛び交い議論が深まっていくものですしね」

さらに山極氏は、こうした社交の場の喪失はコロナ禍だけでなく、技術先行で情報化や効率化が進む現代社会の変化によっても加速されていると指摘する。自分の五感で感じられるもののうち、情報として役立つもの以外は捨象してしまう。そのことが問題だと言うのだ。

「それは生産性向上やコストダウンにつながることであり、まさに資本主義や科学主義が目指すところですが、今回の新型コロナウイルスは、それに対して『ちょっと待て』と言ってるんじゃないか。3 密を避け、他者と思うように会えない現在の状況で皆が感じている閉塞感について、今一度きちんと考えてみたらどうかと。これを続けていくと、我々は外部性というものを全部情報化して、自分たちが処理しやすいよう技術で変えていく方向へ走っていく。それをおかしいと思うなら、やはり我々は外部の世界ともっと和合していかなければいけないでしょうね」

“遊動民”の時代に目指すべき社会のあり方とは

現代社会がコロナ禍で足踏みしている今は、我々がその方向性を見つめ直す機会でもあるという山極氏。これからどのような社会を目指していくべきなのか。

「僕はこれからは“遊動民”の時代だと考えているんです。空間的にも社会的にも人がもっと大きく柔軟に動くという意味でね。そして、この時代を迎えるにあたっては、社会を二つの面から変えていくことが大切。一つは、個人の所有を減らしもっとシェアを増やしていくこと。人が移動するのだから、必要なものは現地で調達すれば済むし、所有物は少なくて構わないはずでしょう。もう一つは、人間同士がもっと頼り合う社会に変えていくこと。今は自己責任の時代で、他人に迷惑をかけないことが良しとされる風潮になっているけど、これは逆ですよ。人間は本来、互いに迷惑をかけて生きている生き物なんだから、もっと他人に頼る方向にマインドシフトしたほうがいい。だから僕は、これからはシェアとコモンズ、すなわち分かち合いと公共財を増やすべきだと、いろいろな場で言ってます。低成長の時代には、国民の給料は昔のようには上がらず、国も多くの収入を得られない。だったらもっと公共財を作って、福祉国家へと移行していくのも一つの手かも知れない。これからは自分の生き方に合った仕事を求めてもっと柔軟に職場を変えたり、

複数の拠点を持ったりする“複線型”の人生を選ぶ人が増えていくでしょう。みんなが横並びで同じ時期に就職し、同じ初任給をもらい、一生同じ会社で働き続けるというのは時代遅れなんです。このような“複線型”の生き方は、“遊動民”の時代になればどんどん世の中に広がっていく。当然、大学もこうした動きに対応する仕組みを作っていくことが大切でしょうね」

日本の強みを生かした グローバルな教育戦略を

ニューノーマルに向けて社会を見つめ直していく必要があるように、大学の教育も変化していかなくてはならない。そして、その中心的役割を担うのが、国立大学であると山極氏は明言する。なぜなら国立大学こそコモンズの最たる組織だからだ。

「これから国立大学は、もっと地域に開かれたコミュニティの核になっていくべき。若い学生が安く学べることは当然として、ビジネスに役立つ能力を身につけたい社会人も、どんどん受け入れる。今より多くの地域の人々を引きつけ、つなぎとめる場所、戻ってくる場所になっていくことがポイントですよ」

さらに山極氏は、日本の将来を見据えた国家戦略として、国立大学をもっと有効に生かしていくことが重要であると強調する。

「国立大学協会の会長のときから言ってますが、日本は“教育立国”を全力で目指すべきです。よく日本の小中学生の学力は世界トップレベルなのに大学がランキング上位に入らないのは怠慢ではないか、などと言われますが、とんでもない。あの順位づけを鵜呑みにしてはいけない。決して日本の教育の中身やシステムは悪くないですよ。だから、日本の教育を海外に“輸出”できるよう戦略を練っていくことが必要なんです」

では、日本の高等教育は、具体的にどのような改革を進めていけばいいのだろうか。

「まず、一つは日本で学ぶ留学生をもっと大切にし、その力を生かすことです。彼らは日本という国の良き理解者となり、将来貢献してくれる可能性を持つ、まさに日本の財産となり得る人材。なのに、コロナ禍の対応に追われる中で、彼ら留学生に対するケアやサポートは後回しにされ、今後のこともあまり考えられていない。日本の大学は授業料は安く、教育や研究のレベルは高い。さらに安全・快適に学べる環境が整っていることなど、他国が真似できない魅力がたくさんあります。しかも、今の時代はオンラインで海外に授業を公開して、学びの内容を直接アピールすることもできるんですから」

コロナ禍の今、すぐに外国からの留学生を受け入れるのは難しいが、収束すれば日本で学びたいという留学生はたくさん現れる。その準備を今から進めておくべきだと訴える。

「もう一つ大切なことは、日本人の教員を海外にもっと送り出すこと。これまでもJICAの協力隊員として教員派遣は行われてきましたが、これからは、海外に派遣した日本人教員を通じて優秀な学生が日本に来る仕組みを整えるべき。実際、日本人教員を欲しがる国は、世界中にたくさんありますからね。これらの国と高等教育において Win- Win の関係を築くことが重要です」

全体を見据え、 体感と対話を大切にしていこう

ニューノーマルがどのような社会になるのか、今はまだ誰も明言できる状況にない。だが、確実に言えるのは、次代の社会をつくる主役が今の若者たちであるということ。この世代に向けて山極氏は、自身の体験を踏まえた助言を贈る。

「フィールドワークにしても実験やゼミにしても、全体を見据えながら個々の学びをきちんと身体化させていくことが大切。それがスムーズに行われないと頭だけになってしまう。例えば僕の研究では、フィールドでゴリラを観察する作業だけが重要なんじゃなくて、森を歩く楽しさってものを知らなくちゃいけない。それにゴリラのちょっとした行動から何が起こってるのかを一瞬で悟ることも大事だし、ゴリラ以外の動物に気を配る必要もある。僕が森を歩くときのガイドはサルとゴリラです。彼らについて行くといろいろ発見があるんですよ。アフリカの森でゴリラと一緒に歩くと、彼らはゾウが近づいて来るのに必ず気づいて回避します。ちゃんと予測して歩いているわけ。彼らといると自分の直観にも敏感になれるんですよ」

ほかにも我々がゴリラから学べることは多いと語る山極氏。例えば強い力を持つ個体がいても無闇にそれを行使することはなく、常に対等、平和であろうとするのだと言う。すぐに勝ち負けをつけたがる人間社会は見習ったほうが良さそうだ。

「こうしたこともゴリラの群れと肌で接してわかったこと。ただ行動データを集めたいだけだったら、データロガーをつけるだけで終わります。やっぱり、その場っていうものを実感しながら、参加していかないとね。これは、どんな学問でも同じで、ゼミだとしたら、手順や段取り、場の雰囲気を、一人ではなくみんなで感じることが大切。仲間の身振り手振りを見て、言葉を聞きながら身体化しつつ、相手にもそれを感じさせていかないといけません。学びは“対話”を根幹としている。対話っていうのは別に言葉を交わし合うだけじゃなくて、“みんなでやる”ってことです。結局、それが重要なんですよ」

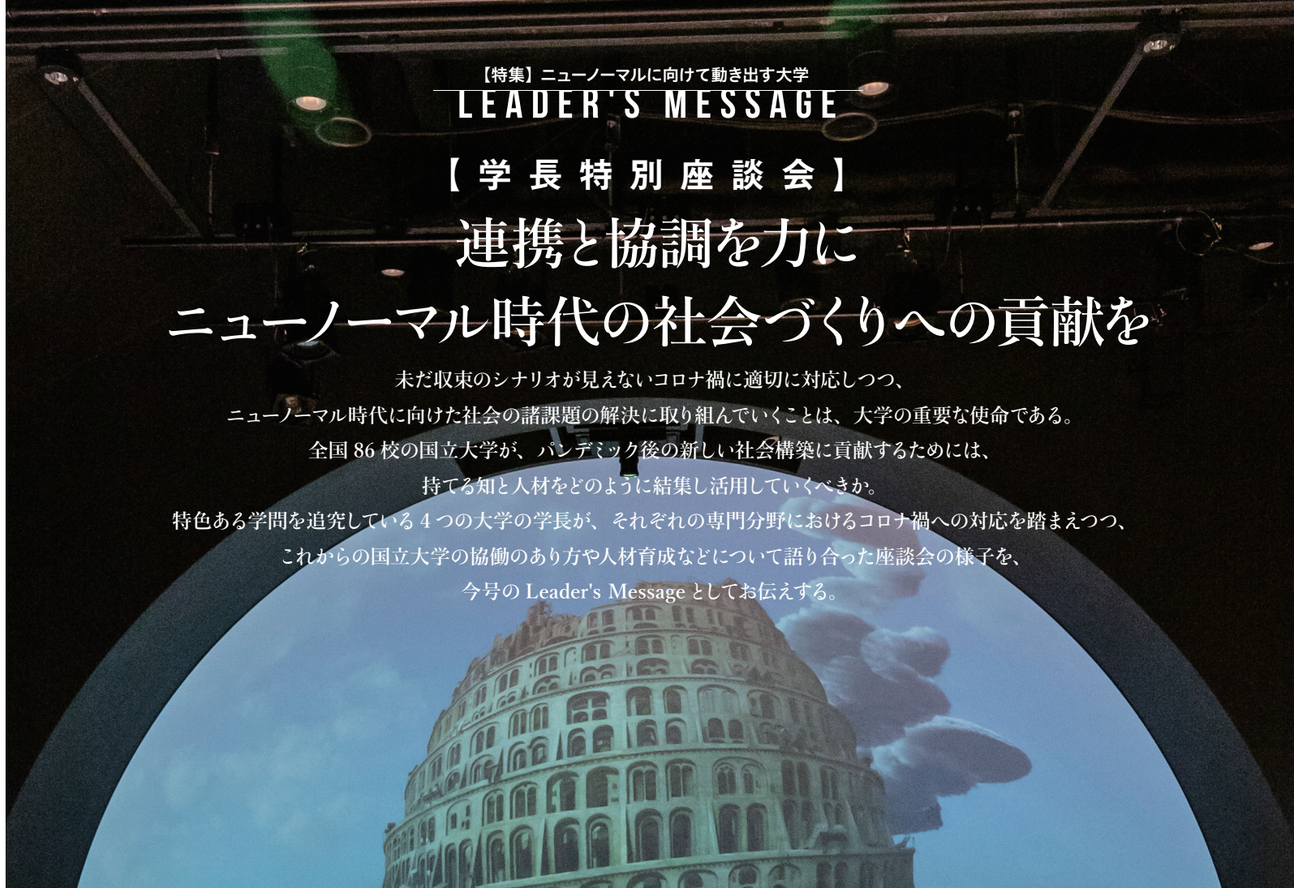
フィールドワークと対話の達人が語る若い世代へのアドバイス。生きた学問の醍醐味を求める心にきっと響くに違いない。

山極壽一（やまぎわ じゅいち）霊長類学者・人類学者。1952年東京都生まれ。1975年京都大学理学部卒、1980年同大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学。1987年理学博士（京都大学）。1988年京都大学霊長類研究所助手、2002年同大学大学院理学研究科教授。2014年京都大学総長、2017年国立大学協会会長、同年日本学術会議会長、総合科学技術・イノベーション会議議員等を歴任。2020年京都大学総長を退任し、現在、京都大学名誉教授。

【学長特別座談会】

連携と協調を力に ニューノーマル時代の社会づくりへの貢献を

未だ収束のシナリオが見えないコロナ禍に適切に対応しつつ、
ニューノーマル時代に向けた社会の諸課題の解決に取り組んでいくことは、大学の重要な使命である。
全国 86 校の国立大学が、パンデミック後の新しい社会構築に貢献するためには、
持てる知と人材をどのように結集し活用していくべきか。
特色ある学問を追究している 4 つの大学の学長が、それぞれの専門分野におけるコロナ禍への対応を踏まえつつ、
これからの国立大学の協働のあり方や人材育成などについて語り合った座談会の様子を、
今号の Leader's Message としてお伝えする。



東京外国語大学長 林 佳世子（司会進行）
東京藝術大学長 澤 和樹
帯広畜産大学長 奥田 潔
筑波技術大学長 石原保志

会場は、遠隔でのコンサートやパフォーマンス配信などにも対応する東京藝術大学「Arts & Science LAB.」の球形ホール。
COI 拠点として、「感動」を創造する芸術と科学技術による共感覚イノベーションをテーマに研究開発を行っている場所でもある。
当日の背景は、球形スクリーンに映し出されたバベルの塔。恐れ知らずの人類への戒めとされるその故事は、
経済や科学の発展を目指し突き進んできた現代社会に新型コロナウイルスが与えた教訓と通じるものがあるように思える。

座談会の前に、コロナ禍収束への祈りを込めた澤学長によるヴァイオリン演奏が披露された。

対面を重視する教育へのコロナ禍の影響は大きい

林：本日、出席の 4 名が学長を務める大学は、それぞれ専門に特化した研究・教育を行っていますが、各分野では今回のコロナ禍で、どのような変化や課題が生じたのでしょうか。特に芸術分野や障害者支援分野への影響は大きいと想像するのですが。澤先生いかがですか。

澤：芸術分野については、多人数が集まるリスクを避けるということで、昨年 2 月に政府からの要請もあり、演奏会などのイベントは次々に中止・延期が決まり、美術館や博物館などの多くがクローズとなりました。私自身もヴァイオリン奏者としての演奏活動は、半年以上できませんでした。4 月の緊急事態宣言以降、世の中の様々な仕事が苦境に立たされ、売り上げ 7 ～ 8 割減などと言われていますが、芸術分野に関しては、ほぼ 100% なくなってしまったといっても過言ではありません。

奥田：私も以前から学生に対して、自分の専門領域の勉学に励むだけではなく、音楽会や美術館に足を運んで優れた芸術に触れるよう勧めてきたのですが、それも言えなくなりました。人間性の涵養をはじめ学生の教育への影響も大きいですね。

澤：もちろんです。皆さんの大学でも同じだと思いますが、授業をどのように進めていくかについては大変苦労しました。まず、5 月になってから、オンラインで開始しましたが、やはり芸術系大学は、音楽の個人レッスンや美術作品の制作指導など、対面でなければ難しいことが多いです。東京藝術大学では、卒業年度の学生や演奏試験がある学生など緊急性を要する学生に限って、念入りな感染対策を施したうえで 6 月からは実技系の対面授業を再開しました。

林：なるほど。大学で教育と並ぶ柱が研究ですが、芸術系大学の研究には、どのような影響がありましたか。

澤：東京藝術大学の教員にとっては、演奏活動や作家としての創作活動ということになりますが、これも半年くらいほとんど活動できない状態が続き、オンラインでの配信などを工夫しながら行ってきました。満足できる結果とまではいきませんが、逆にこの機会をある意味チャンスとして前向きに捉えて。例えば普通なら 200 人しか入れない演奏会でも、オンラインであれば人数に制限はなく、世界中の人に音楽を届けることも可能です。音質や臨場感などの課題はありますが、それは今後の技術的な発展に期待するとして、今まで以上に多くの人に聴いてもらえることが一つのモチベーションになっています。

社会が非接触・分断の方向に進んでいることが問題

石原：私の専門である障害学や特別支援教育の立場からは、ミクロのレベルで言うと、コロナ禍で対面によるコミュニケーションや接触がしにくくなっていることの弊害が大きいです。報道でも取り上げられましたが、少し前に、ある視覚障害者の方が駅のホームから落ちて亡くなる痛ましい事故がありました。実はこの方にとっては通い慣れた場所で、普通だったら危ないときは周囲が手を差し伸べたりすることが自然に行われていたのです。しかし、今は咄嗟の手助けもしにくい状況であり、このことが事故の背景にあると想像できます。視覚障害者は他人の肩や手を借りて移動する介助が難しくなっていますし、聴覚障害者は、相手の口元を見て話の文脈を理解する「読話」が、マスクで口元が見えないため不可能になっています。そのほか、身体に触れないと必要な介護を受けられない方に対して、十分な介護が行えているのかも大いに気になります。

林：確かに切実な問題ですね。

石原：ええ。一方、マクロの視点で見ると、これまで世の中はインクルーシブな社会、共生社会、ダイバーシティという方向を目指して、マイノリティの方も含めて皆が融合し、共に幸せになっていこうという流れがありました。SDGs もそうですね。それがコロナ禍で個人間の接触が絶たれ、融合よりもむしろ分断の方向に進んでいる。これは非常に重い問題です。

澤：その分断が、特に社会的弱者に深刻な影響を与えていると。

石原：そのとおりです。ただ、プラスに作用していることもなくはありません。先ほど芸術分野におけるリモート演奏会のメリットの話が出ましたが、私の専門分野でも、例えば聴覚障害者にとっては対面コミュニケーションよりもテレビ会議の方が、手話の動きが見やすいとか、マスクをする必要がないから口元が見えて話を理解しやすいといったメリットがあります。また、これまで私はインクルーシブ教育の一つとして、離島や僻地にいる障害を持つ子どもがテレビ会議システムを利用して勉強する方法を研究してきたのですが、その成果が図らずも生かされることになりました。また、今回のコロナ禍で多くの人がオンライン会議やリモート授業を体験し、その中で映像や音声が不鮮明だったり途切れるなどの問題にも遭遇したはずです。実はこうした不自由さは、障害者が日常的に感じていることにも通じます。そういった意味で、人々がコミュニケーションについて考えを深め、ひいては障害者理解にもつながればいいですね。

農学が対象とする“ 食 ”が変化してきている

奥田：私の大学は、畜産科学、獣医学を核とする農学系単科大学であり、「食を支え、くらしを守る」をミッションに掲げています。すなわち、“Farm to Table” のすべてを対象としているわけですが、そのうちコロナ禍の影響が最も強く出ているのが、外食産業に関わる領域ではないかと思います。具体的に言うと、第一次産業では今、ほうれん草やレタスなど葉物野菜の市場価格が低くなっていますが、これは豊作だからという理由のほかに、コロナ禍で外食産業が落ち込んで需要が減っているのが大きな要因です。また、第二次産業では外食向けの農産物の加工が減っており、第三次産業では食品の流通業界も深刻なダメージを受けています。農畜産業の枠にとどまらず、食に関わる幅広い業種が、厳しい局面に立たされていると言えます。

林：こうした問題に対して農学研究はどのように対応していくのでしょうか。

奥田：多くの人が外食を控えるということは、自分で食材を買って家庭で料理を作るスタイルにシフトしていくことを意味します。そのとき人々が最も重視するのは、安全な食かどうかということでしょう。外食をするときのような、店の好みなどの要素は食選びに関係なくなるので。さらに、これからはインターネットで食品を購入する消費者も増えますから、安心を保証する食や付加価値の高い食へのニーズは高まっていくはず。ですから農学分野では、より安全な食品や優れた機能を持つ食品を開発したり、安全に届けたりする方法を研究する取り組みが、これまで以上に活発になると考えています。

林：私も一消費者として、野菜などを直接インターネットで買うことが増えました。こうした流れが農学にも影響を与えているんですね。具体的にはどのような取り組みが進みますか。

奥田：例えば有機農法の革新ですとか、土の中の微生物の管理・活用などが代表例です。さらに、現時点の安心だけでなく、自分たちの未来にもやさしい食ということで考えれば、環境への負荷の低減を考慮した生産技術や、バイオエネルギー利用技術の開発、それにアニマルウェルフェアの向上をめざす研究なども加速するでしょう。まあ、これらはコロナ禍以前からの動きではありますが。

澤：なるほど。ところで私は芸術教育では対面授業が必須であると強調しましたが、実学系の学問である農畜産・獣医系も同じではないですか。

奥田：そのとおりです。私の大学でも実験・実習に非常に重きを置いています。しかし、感染の拡大当初は、教員が作成した動画を利用しての授業に代替せざるを得なくなりました。それなりに成果もありましたが、やはり対面教育をゼロにはできませんから、夏以降、オンラインと対面のハイブリッド型に徐々に移行していますね。

歴史に学ぶことの重要性を改めて認識した

林：東京外国語大学は、外国語の教育・研究とともに、地域研究に力を入れています。この地域研究の中で、私自身が専門とする歴史学の立場から今回のコロナ禍を通じて改めて学んだことは、感染症との闘いは人類の歴史の重要な一部であるということです。人類はこれまでに多くのパンデミックと闘ってきて、直近の例では第一次大戦中に全世界で猛威を振るったスペイン風邪があります。それから 100 年が経ち、科学技術がどんどん進歩して、世の中は人類の思うままになるだろうと誤解されてきましたが、やはり我々は自然の一部なんだ、自然とうまくやっていかなくてはいけないんだと気づかされました。歴史は繰り返すと認識すること、歴史を長期スパンで考えること、そしてグローバルな文脈の中で捉えるということ。こうした歴史学の最近の潮流を踏まえて世界を見ることの意義は大きいのです。過去に学ぶことばかりが必ずしも正しいとは限りませんが、少なくとも歴史に学んで準備することは大切ですね。

石原：スペイン風邪の病死者が、第一次世界大戦の戦死者より多かった、という事実も広く知られるようになりましたね。コロナ禍が歴史的な知識を高めたと言えるかもしれません。

澤：20 世紀から人類は効率主義や営利目的の方向に突っ走ってきたけれど、一度立ち止まって考えるべき教訓があるように思います。

林：今回のコロナ禍で地域研究の素材になるような現象もたくさん出てきました。それまでグローバル化に突き進むと思っていたところで、突然、国家が国民を守るという体制が前面に現れましたし、国境の見方が変わり、国民の流れをコントロールするのは国家であるということもはっきりしました。

石原：コロナ禍以前から自国ファーストの動きが米英を中心に始まっていましたが、それが一気に拡大しましたね。

林：自国第一主義のもと、国民の動きをうまく舵取りできる指導者がいるかどうかで、国の命運が変わることにもなってきました。皮肉なことに、そうしないと国民を守れない、自由な国の方がかえって感染が広がるということが現実に起きています。逆に言えば、コロナ禍によって、社会的、文化的な背景のようなものがあぶり出されたようにも思います。コロナ禍は直接的には自然の災

林 佳世子（はやし かよこ） 1981年お茶の水女子大学文教育学部卒業。1984年同大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻修士課程修了。東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻博士課程退学。東京大学東洋文化研究所助手、東京外国語大学外国語学部教授、同総合国際学研究院（言語文化部門・文化研究系）教授等を経て、2019年東京外国語大学長に就任。専門分野は西アジア社会史、オスマン朝史。

厄ではあるけれど、社会保障の不備・不足や貧富の差、教育の混乱など、人間側にも問題があることは明らかです。現在のパンデミックが収束した後には、このコロナ禍の時代を扱う際立った研究が出てくると予想しています。

澤：歴史を振り返ると、日本では奈良時代に天然痘の大流行があって大仏が建立され、その後、天平文化が花開いたり、ヨーロッパでは中世のペストの後にルネッサンスが起こるなど、大きな芸術的変革につながった事実がありますね。これは偶然ではないでしょう。

林：パンデミックは人間が生きることを考える契機になりますし、芸術的なインスピレーションにつながるのかもしれませんね。

澤：そう思います。そして新しい時代の芸術創造の一番の担い手が、若手の芸術家なのですが、今は彼らの活躍の場が失われてしまっているのが本当に残念でなりません。私の大学にも、芸術家、音楽家になることをあきらめると言い始めた学生が少なからずいます。こうした「コロナ世代」と呼ばれるであろう若者を支援していくことは、大学にとって重要な責務ですね。

様々に広がる専門分野の連携・協働の可能性

林：難題は山ほどありますが、前号で国大協会長の永田先生が語っていたとおり、多様な分野を擁する全国 86 校の国立大学が総力を結集すれば、コロナ禍の課題解決に様々な形で貢献していけるはずです。我々4 名の大学は、いずれも特色ある専門分野を追究していますが、それぞれの研究や教育活動では、どのような異分野との連携・協働の可能性が考えられますか。

奥田：コロナ禍で安心安全な食への流れが加速している農学分野では、例えば農作物の保存性を高める技術開発などで、工学分野との連携を進めていけるのではと考えています。また、先ほど少し触れたバイオエネルギー開発においても工学の力が不可欠です。現在、帯広畜産大学は、小樽商科大学、北見工業大学との 3 大学経営統合を進めていますが、この新体制も連携推進の起爆剤になるのは間違いありません。また、教育面においては、対面実習ができない状況に備えて、より優れたデジタル教材の必要性が高まっていきます。その際、ICT 分野はもちろん、バーチャルな技術の導入で先行している医学分野との協力や、よりリアルな表現を求めて芸術分野とコラボレーションすることなども考えられます。

奥田 潔（おくだ きよし） 1977年帯広畜産大学畜産学部獣医学科卒業。1980年同大学大学院畜産学研究科修士課程修了。1982年ミュンヘン大学獣医学部博士課程修了。岡山大学農学部助教授、ミュンヘン工科大学生理学研究所客員教授、岡山大学大学院自然科学研究科教授、ミュンヘン大学獣医学部客員教授、岡山大学農学部長、岡山大学大学院環境生命科学研究科教授等を経て、2016年帯広畜産大学長に就任。岡山大学名誉教授。専門分野は獣医臨床繁殖学、生殖内分泌学。

石原：確かにどのような分野も、ICT や情報メディア分野との協働は、多くの成果が期待できると思いますね。障害者教育・支援の分野では、より優れたテレビ会議システムやオンライン授業システムが開発されれば多くの恩恵がもたらされるでしょう。例えば家から出られない人、移動が困難な人たちが、本当にその場にいるような臨場感を味わえるシステムが実現できればいいですね。今まで社会に参加できなかった人が、積極的に社会進出して活躍することをサポートしてくれるような。

澤：東京藝術大学でも ICT 技術を活用して、主に座学系の授業のオンライン化を進めていますが、特にオンデマンドのものは、いつでも、どこでも、何度でも見直せるので、学生にとても評判が良いですね。また、これは奥田先生のおっしゃる安心な食にも通じる話だと思うのですが、モーツァルトの音楽を聴かせた乳牛は良い乳が出るとか、肉牛はおいしい肉が取れるということを良く聞きます。クラシック音楽には、薬品などに頼らず食を改善する効果があるのかもしれません。今後、科学的な研究を行って確かめてみたいと考えているのですが、それには動物を扱う研究分野の協力が要るでしょう。

奥田：面白い話ですね。過去に診療で回った畜産農家でも牛舎に音楽を流して牛をリラックスさせて搾乳するということを行っていましたし、先進的な畜産農家は「カウ・コンフォータブル」な飼育のために、本当にいろいろトライをしています。

林：興味深い例がいくつか出ましたが、我々が幅広く柔軟な視点で、コロナ禍の社会のためにできることを探れば、まだまだ多くの専門分野の融合・協調が考えられると思います。それを真剣に追究していくことは、国立大学の潜在力を生かすことでもありますし、大切なことですね。

大切なのは教養を身につけた人材を育てること

林：コロナ禍が大学が変わっていく大きなきっかけになることは間違いありません。では、教育・人材育成の面では、これからの大学はニューノーマルを見据えて、どのような取り組みに力を入れていけばよいでしょうか。

奥田：これは社会全体で進めていくべき教育につながることだと思うのですが、今回のコロナ禍では、感染症に対する都市と地方の意識の違いと、そこから生じる差別の問題を痛感しています。私の大学がある北海道では、東京など道外の大都会に行くことと、そこから来た人を受け入れることに対する抵抗感が非常に強く、学生の６～７割を占める本州出身の学生の多くは、それを気にして里帰りを控えています。

石原：私の大学も全国から来た多くの学生が寮で暮らしていますが、同じ問題を抱えていますね。

林：それと共通する構造は東京の中にもあります。東京外国語大学は海外からの留学生が多いのですが、外国の人は危険というイメージを地域で持たれたようで、具体的には幼稚園の散歩コースが大学付近を避けるルートに変更されたりしました。国立大学も周辺の社会との連関がある以上、向き合わなくてはいけない難しい問題だと思いますが。

石原：新型コロナウイルスに感染した人や、感染拡大地域の人を隔離したり差別したりする現象は、世界中で起きています。そして、これは障害者の多くが今まで体験してきたことと通底している部分があると感じます。こうした差別意識は経済の発展と歩調を合わせていて、人々の暮らしが豊かになってくると、世の中はマイノリティの人たちを見捨てない方向に動きます。今は社会がその逆を向いていますね。また、差別というのは情報が正確に入ってこない、曲解されてしまうというところにも起因しますが、現代社会では、間違った情報もインターネットで瞬時に拡散してしまいます。では、どうすれば差別を防げるかというと、やはり教養を育てるということに尽きるのではないでしょうか。単に学歴や偏差値の高さではない本物の知恵を身につけることがポイントだと思います。

林：同感ですね。正しい情報を見分けられる力、それを共有する力、これを個人が身につけることしか解決策は無いように思います。コロナ禍が始まった当初、留学で欧米などにいる日本人の学生が、アジア人ということで無理やり病院に連れて行かれたり、喫茶店に入れてもらえなかったという事例をたくさん聞きました。こうした経験を通じて、生まれて初めて差別される当事者の気持ちを学んだという学生が多くいたようです。正しい情報を取捨選択して共有するためには、教養を育てる教育により力を入れて取り組むべきですね。

連携によるシナジーを、新しい時代の課題解決に生かしたい

澤：芸術に携わる者として、教養と同じように感性や感受性を育てることの重要性も強調したいですね。現代社会は、人のやさしさや思いやりを損ねている部分がたくさんあると感じます。コロナ差別のような問題を乗り越え、人の根源的なやさしさを呼び覚ます力が、素晴らしい芸術にはあると私は信じています。最近、私はあるテレビ局の依頼で地域の人々のためのコンサート番組に出演しました。そこで誰もが知っている「ふるさと」や「荒城の月」といった東京音楽学校（東京藝術大学音楽学部の前身）の大先輩が作った曲を演奏したところ大好評でした。人のやさしさや思いやりの心に訴える芸術の力は、世の中の人も感じているはずです。

石原：経済的なことだけでなく、芸術も人の心を豊かにしますし、歴史や科学を学んで教養を重ねていくことでも豊かな人間性は育まれるでしょう。そのような教養ある人間により構成されるコミュニティ同士が共同活動をして、豊かな社会を創造することと、自由で活力あるグローバル社会を構築していくことは両立可能だと考えます。また、これからの時代を担う若者にとって特に大切なことは、今回のコロナ禍のような予想できない事態や社会の変化に備えて、一人ひとりが自分のオプションを持つこと。それはすなわち予期せぬ課題に対応していけるよう、複数の解決手段を学ぶということです。そのためには大学側も、より多様なカリキュラムから自由に選べるようにするなど、学生自身が自分の意思で身につけるものを決められる仕組みを用意する必要があります。さらに、この意思決定を適切に行うためには、心理発達を促すことも重要になってくると思います。これをしっかり大学で訓練できれば、ニューノーマル時代の社会への対応力を高めていけるのではないでしょうか。

澤 和樹（さわ かずき） 1979年東京藝術大学大学院音楽研究科器楽専攻（ヴァイオリン）修了。ロン＝ティボー、ヴィエニアフスキ、ミュンヘンなどの国際コンクールに入賞。イザイ・メダル、ボルドー音楽祭金メダル受賞など、ヴァイオリニストとして国際的に活躍。1990年澤クァルテット結成。1996年指揮活動開始。2004年和歌山県文化賞受賞。東京藝術大学副学長、音楽学部長等を経て、2016年東京藝術大学長に就任。英国王立音楽院名誉教授。

奥田：学生が様々な変化に対応できるよう学びやキャリアの選択肢を増やすためにも、大学間の連携はこれからますます重要になるでしょう。それも、従来からの授業の相互履修のレベルを超えた、より柔軟なシステムが必要だと思います。私たちが進めている 3 大学経営統合では、単なる単位互換ではなく、卒業論文を出した大学で卒業できるシステムを導入しようと計画しています。これは入学した大学と卒業する大学が違っていようが、卒業までに何年かかろうが構わないという自由度の高いもの。大学設置基準や法改正などクリアすべき課題はいくつかありますが、これからの大学連携に新たな可能性を提示する先駆けとして、ぜひ実現させたいと思っています。

林：豊かな教養と人間性、そしてそれを基盤とする対応力や意思決定力を身につけた人材を育てていくことが、これからの国立大学の重要な使命であることを強く感じます。そして、それを実現するためには、全国 86 校の国立大学が一層つながりを深め、プログラムの多様化や共有化などを積極的に推進すること、さらに、研究においても積極的に異分野との協働を進め、ニューノーマルな社会の諸課題の解決に新しい視点・アプローチで取り組んでいくことが大切であるということですね。国立大学が方向性を共有し、連携によるシナジーを発揮すれば可能性は様々に広がることを、本日の座談会を通じて確認できました。

石原保志（いしはら やすし） 1987年3月筑波大学大学院修士課程教育研究科障害児教育専攻修了。茨城県立霞ヶ浦聾学校教諭、筑波技術短期大学教育方法開発センター助手、助教授、同大学 障害者高等教育センター助教授、教授、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター教授、同センター障害者支援研究部長、筑波技術大学副学長等を経て、2019年筑波技術大学長に就任。専門分野は聴覚障害教育学。

01 東京外国語大学

国内外に向けた37言語のオンライン講座をスタート

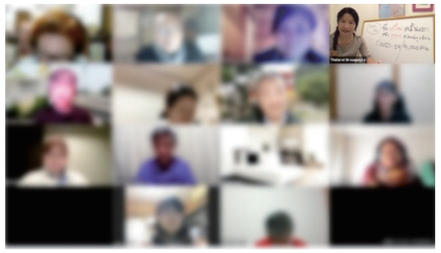
東京外国語大学は、2006年から広く大学生や社会人を対象に「TUFS オープンアカデミー」を開講し、延べ２万人の受講者に語学や教養の講座を提供してきた。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、昨年11月に全講義をオンラインに移行し、新たなスタートを切った。

2020年度秋期間は、37言語の語学など全 120講座をオンラインで実施し、延べ 2,241名が受講。うち 25%は、従来の教室型では受講できなかった首都圏外や海外からの受講者だ。今春には 45言語の語学など 150講座を開講予定である。アムハラ語、ポーランド語など、日本国内では学習の機会が少ない講座も多数提供する。

120 講座・37 言語のオンライン講座を提供

コロナ禍を受けて広がった教育のオンライン化は、大学教育のみならず、大学の行う社会貢献事業も大きく変えていく。同大学は、これまでも言語教育・異文化理解教育を社会人向け講座の形で提供してきたが、オンライン化によりその裾野は日本全国に広がった。

外国人労働者の受入れなどに伴い、日本のどこにいても、様々な言語、異文化や異なる価値観に対する理解が求められる現在、こうした学習の機会を必要としている人々、現場は数多い。オンライン講座への反響は大きく、さらに多様な言語、文化講座への要請も高まっている。その期待に応え、事業をさらに拡大していく予定である。


タイ人ネイティブ講師によるタイ語中級会話クラス

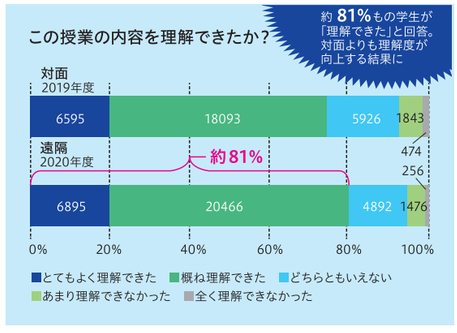
02 茨城大学

実績とステークホルダーの協力を礎に、大学教育のDXを促進

茨城大学では、コロナ禍以前から BYOD 環境や情報支援体制の整備を推進。そのため遠隔授業もスムーズに開始された。遠隔授業に関する全学 FD も 20 回近くに及び、同大学の強みでもある体系的な教育質保証のための調査システムにより、遠隔授業の効果もいち早く検証することができた。

調査では、遠隔授業において理解度・満足度、授業外学修時間の向上が確認されたことから、デジタルコンテンツを生かした授業の有効性を確信。一方、それらの取組の推進には学内外のステークホルダーの理解が欠かせないため、戦略的な広報を展開した。授業調査結果に関するプレスリリースは、全国規模のテレビや WEB ニュースでの報道にもつながった。また、授業調査の結果を踏まえ、学生たちが今後の望ましい授業のあり方を発表する取組もあった。さらに、昨年秋に実施したオンライン教育に関するシンポジウム(共催：国立大学協会)では、茨城県内の他の大学等の参加も得て、地域で連携した教育改革の姿勢も訴求した。

遠隔授業を経験した学生による授業に関するプレゼンテーション



前期の授業調査結果の例

今後はステークホルダーの理解・協力のもと、スライドや動画等の授業コンテンツを事前学修に生かすような新たな授業スタイルへの転換により、大学教育の DX を率先して進めていく。

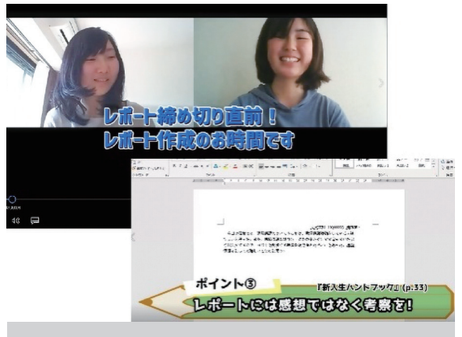
03 信州大学

オンラインによる 1年生のための学修支援体制を構築

オンラインでの学修相談対応の様子

信州大学では、全学部の１年生が利用する中央図書館においてピアチューターによる学修支援サービス「ピアサポ@ Lib」を行っている。「ピアサポ@ Lib」はラーニング支援部門とライティング支援部門からなり、それぞれ学修相談、レポート執筆支援を担っている。2020 年度からは、コロナ禍をきっかけとしてオンラインによる支援を開始した。事前予約することで、１年生は自宅に居ながらピアチューターに学修の相談ができる。一方、中央図書館では予約なしでも対面での相談が可能とした。また、初めてレポートに取り組む１年生のためにピアチューターが制作した動画「レポートの書き方講座」を公開し、学生に主体的な学修機会を提供している。

支援を受けた学生からは「自分の気づかないことを指摘してもらえた」「自信を持って取り組めるようになった」といった声が聞かれた。複数キャンパスを有する同大学において、オンラインによりキャンパスを超えた支援体制が整った意義は大きい。来年度は、Zoom等を活用したレポート執筆支援のオンラインイベントも予定。オンラインを駆使することにより、１年生に活用される学修支援の実現を目指している。



ビデオコンテンツ「レポートの書き方講座」の一場面

04 金沢大学

コロナ禍の先にある未来社会を拓く人材育成に尽力

金沢大学は、文理融合の学知をもとにイノベーション創出をリードする人材の輩出を目指す「融合学域先導学類」を本年 4 月に創設する。これに先立ち、同学類が展開する課題発見型学習を通じたアントレプレナー教育がもたらす教育効果の真価を問うべく、同学類の教育方法を取り入れた共創型のオンラインプラットフォーム「ビヨンドコロナフォーラム(BCF)」を展開した。

BCF では、大学生や高校生が、自ら見出したコロナ禍の社会的課題に対し解決のためのアイデアやビジネスモデルを動画で提案。プロデューサーとして参画する同大教員、地元企業、起業家らの助言を受けながら、事業化を目指して共に解決策を磨き上げた。約半年の募集の結果、国内外の学生から計 407 件の提案があり、早くも同大学の学生 5 グループが起業に向けて準備を進めている。

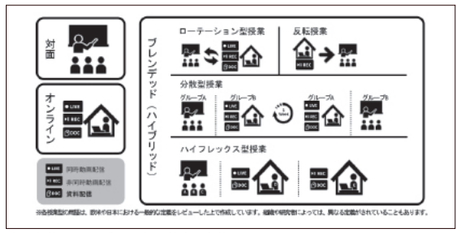
オンラインで開催した BCF イベント「BCLive」

同大学では、文理融合の学びと STEAM 教育を全学に波及させ、自身の専門に軸足を置きながら異分野・異文化との協働により社会的課題を解決する社会変革先導人材の養成に力を入れていく。先導学類創設を契機に、BCF の取組が示すアントレプレナーを目指す機運を全学で高め、コロナ禍のみならず、未来社会を切り拓くことができる人材を育成していく。

BCF を運営する学生スタッフ

05 大阪大学

動画コンテンツによる新入生の学習保障～ブレンデッド教育体制確立に向けて～



大阪大学におけるブレンデッド教育の定義

大阪大学では、2020年3月に「ウェルカムチャンネルチーム（座長：佐藤浩章准教授）」を設置した。授業開始前段階の新入生に対し、平日毎日、模擬授業、学習方法やキャンパスライフについて学ぶ動画コンテンツ（総数 63本）の作成・配信を行い、その総視聴回数は 31,359 回（2021年2月19日現在）、また、LINE 公式チャンネル友だち登録者数は、入学生の約 3 分の 1 にあたる 1,025名（2020 年5月30日現在）となった。

視聴した新入生からは「授業開始が延期になりフラストレーションを抱えていたが模擬授業が解決してくれた」「大学からのサポートを受けていると感じる」など肯定的な意見が多く寄せられた。授業の受け方、レポートの書き方などもわからない新入生にとっては、オンライン授業・課題提出への初期対応としても非常に有効であったことから、今後もこの取組は継続していく方針である。

同大学では、高大接続から社会人を対象としたリカレント教育に至るまで、一貫した教育体制の構築を目指し、学習効果を最大化するためのブレンデッド教育（対面とオンラインの学習活動を効果的に組み合わせたカリキュラムおよび授業形態）を来年度以降も教育方法や評価方法を学ぶための FD（教員研修）などの場面で推進していく。

阪大ウェルカムチャンネル配信コンテンツ一覧

学　習	・阪大模擬授業（遠くて近き仲・知られざる日本とスウェーデンの交流 -、大学だからできる外国語の学び方、幸福とは？・哲学・倫理学の歴史から -、月の科学の最前線、ミクロな世界の不思議・量子力学入門-、知的書評合戦！・ビブリオバトル入門・）・完璧マスター！スタディスキルズ講座（アカデミックライティング・リーディング、プレゼンテーション技法、大学での学び入門）
学生生活	・OU RADIO ・課外活動オリエンテーション Web サーリオに参加しよう！ ・キャリアセンターのご紹介 ・多言語カフェのご紹介 ・グローバルな交友関係を築こう！
スポーツ・健康	・藤田先生のマッツル体操 ・チェンチェンのうがい・手洗拳法！ ・手軽にできるストレス解消法 - ポジティブ心理学の視点から - ・新型コロナウィルスを知ろう
その他	・ウェルカムメッセージ（全学教育推進機構長） ・履修登録基礎の基礎 ・大阪大学学生歌 ・ウェルカム阪大！新入生交流会ダイジェスト

06 鹿児島大学

バーチャル家庭訪問を教材にヘルスアセスメント教育を実施

教材制作のための撮影の様子

鹿児島大学医学部保健学科では 4 年次にチーム医療実習を実施している。2020年度は、コロナ禍で通常の実習が困難となったことから、離島住民のバーチャル家庭訪問を教材としたヘルスアセスメント教育をオンラインで実施した。

3 専攻（理学・作業・看護）の教員が鹿児島県三島村の黒島に赴き、学生に扮して一人暮らしの高齢者宅にて家庭訪問を行い、その様子を撮影した動画を制作。教育効果を高めるために、実習の目的・目標、方法、評価、注意事項等を記載した要項を作成のうえ、アセスメントの視点を明確にするためのアセスメントシートも開発した。

実習では、学生が対象者とその居住地域について自らの専門性を踏まえたアセスメントを行い、離島での高齢者支援のあり方についてチーム医療の視点で議論。「バーチャルではあったが対象者の生活がよく見え、他専攻の学生と議論することで対象者をより多角的に捉えることができた」といった感想が聞かれた。

コロナ禍におけるバーチャル教材を用いた教育のモデルにもなることから、同学科では制作した動画を公開する予定であり、動画の多言語化も進めている。さらに取組を、他学部と連携した「離島における保農獣工連携家庭訪問事業−人間・作物・動物・集落の健康のための三島村プロジェクト−」に発展させていく予定である。

オンラインでの学生発表の様子

北海道大学
オンライン教育「バランスドオーシャン」で
トップサイエンティストを早期発掘・育成

東北大学
あらゆる策を実施するニューノーマル時代の総合的学生支援

群馬大学
新入生に対し、在学生がオンラインサポートを実施

福井大学
導入壁を軽減したオンライン授業システムの開発

浜松医科大学
対面とオンラインのハイブリッド型医学教育の実践

愛知教育大学
リモートの強みを生かせ！ with コロナ時代のキャリア支援活動

豊橋技術科学大学
経済支援に生活支援。学生の「元気」は大学が取り戻す！

滋賀医科大学
3密回避して分かったバーチャル人体解剖学実習の有用性

大阪教育大学
教職大学院と附属学校園による New Normal へのサポート

岡山大学
岡山大学・米国務省「重要言語奨学金（CLS）プログラム」を
オンラインで開催

山口大学
学生と共に育むニューノーマル時代の教学マネジメント
～ 正課・正課外教育の新しい姿 ～

香川大学
第 72 回香川大学祭は、FM 香川とタッグを組んでオンラインで開催！

愛媛大学
ニューノーマル時代の国際連携の取組

佐賀大学
オンライン・ライブ授業とオンデマンド授業を
活用した改良型ハイフレックス授業

熊本大学
オンライン記者会見で熊本発の研究成果を
県外の報道機関にも積極的にアピール

宮崎大学
オンライン完全対応「宮崎・学生ビジネスプランコンテスト」を通じた
アントレプレナーシップ教育の実践

琉球大学
新型コロナウイルス感染症拡大に伴う琉球大学の学生支援
～ コロナ新時代に向けた取組 ～

高エネルギー加速器研究機構
ニューノーマル時代に対応した放射光実験施設における
リモート実験と全自動データ測定